

富山県高岡市

頭川城ヶ平横穴墓群

第Ⅰ次緊急発掘調査概要



1983年3月

高岡市教育委員会

発刊にあたって

近年の地域開発は、埋蔵文化財の保護を困難にしています。開発計画の段階で、埋蔵文化財の保護のための協議が行なわれ、全面保護の方向で開発計画を修正しながら、開発と保護の調和をはかることが積極的に望まれています。開発は再行可能ですが、遺跡は一度破壊されると、再生できないことを改めて認識することが必要です。過去から現在への歴史を学ぶ手がかりとなる埋蔵文化財に無関心な姿勢からは、本当の豊かな文化は創造しません。過去の文化遺産を愛することは、現代に生きる者の責務であります。

さて、今回の高岡市頭川城ヶ平横穴墓群の調査は、開発者である山口吉次氏（日本海頭川鉱山山口産業代表）のご理解をいただき、調査を実施することができました。その結果、富山県でも最良の保存状態の横穴墓群であることが判明しました。この成果が、本市の歴史の一端を解明する資料となり、今後の埋蔵文化財保護の一助になれば、幸甚に存します。本文ながら、調査に際し、いろいろご協力下さった山口氏ははじめ地元の皆様に謝意を申し述べます。

昭和58年3月

高岡市教育委員会

目 次

例 言

発刊にあたって

例 言

I 進路の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
II 調査に至るまで	2
III 調査の概要	2
1 沿路の立地	2
第2図 遺跡地形図	2
第3図 頭川城ヶ平横穴墓群	3
発掘区及び概略配置図	3
2 調査の経過と横穴墓のあり方	4
第4図 第4号横穴墓実測図	5
3 第4号横穴墓	6
第5図 遺物実測図	7
4 頭川城ヶ平第4号横穴墓の年代について	8
第6図 室内の主要占墳・窓跡	8
(6~7e) の分布	8
V まとめ	9
引用・参考文献	9
付 載	
頭川城ヶ平横穴墓群及び頭川古墓出土人骨について	10
第7図 第4号横穴墓玄室内人骨の分布	11
第8図 第4号横穴墓玄室内人骨の分布	11
写真図版	

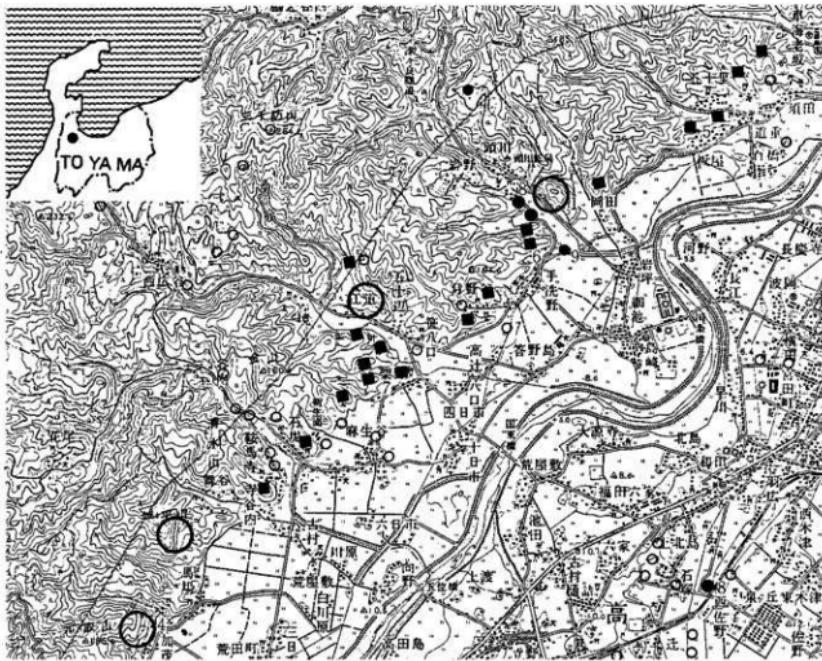
- 本書は、日本海頭川鉱山の土砂採取に伴う高岡市頭川城ヶ平横穴墓群の緊急調査報告書である。調査は、昭和57年8月19日から同年9月16日まで（うち実働25日間）を実施した。調査面積は1,500m²である。
- 調査は、恩賜補助金の交付を受け、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣指導を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
- 調査事務局は、高岡市教育委員会社会教育課に置き、調査事務を文化係長太田健一、主事逸見謙が担当し、社会教育課長白田富一が統括した。
- 調査参加者は、次の通りである。
調査担当者：富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事酒井直洋・高岡市教育委員会社会教育課主事逸見謙
調査員：富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事野村時野・久々忠哉・松島吉信
調査補助員：有馬明吉・藤井一成
発掘作業：五十嵐周光・竹内義二・吉川政雄・寺守正一・神谷政雄・萩原悦子・東よしこ・松浦とし子・細すみ子・中谷和子・荒木けい
- 本書に掲載した遺物・遺構実測図は酒井が作成した。
写真撮影は、遺構・狩野・酒井が行ない、遺物は富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事橋本正春・酒井が行なった。
- 人骨は、富山県医療科学大学医学部森井佐麻・松田健次郎氏に鑑定していただき、無隔をたまわった。歌引等は、富山市科学文化センター・学芸員布村昇・南都久男西氏に鑑定していただいた。
- 現地では、次の各氏に貢献な御言をいただいた。ここに驚く感謝する次第です。
清義・林大門・小島俊彰・西井龍儀・舟崎久雄（富山考古学会）、秋山進午・和田晴吉（富山大学考古学研究室）なお、山口吉次氏には、調査報酬等の保管場所、飲料水・駐車場の提供をいただいた。改めて、感謝申しあげます。
- 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の助言、協力を得て、酒井と逸見が分担して行ない、各々の責は文末に記した。

I. 遺 踪 の 環 境

富山県の西部に、小矢部川が流れ、その左岸には、ほぼ川沿いに標高 230m 余の丘陵が、小矢部市・福岡町から高岡市へと続いて富山湾まで延びている。この丘陵は、高岡市の西端に位置することから西山丘陵と通称される。西山丘陵では、県内最多の横穴墓が発見されている。南西から順に、小矢部市の桜町横穴墓群、山川横穴墓群があり、福岡町には、馬場・赤丸城ヶ平横穴墓群、加茂城ヶ平横穴墓群がある。さらに、高岡市へすると江道横穴墓群の存在がこれまでに明らかになっている。今回発見された頭川城ヶ平横穴墓群は、江道横穴墓群の北東 2km あり、小矢部川の支流が開いた頭川谷の人口南西側斜面に位置し、西山丘陵における横穴墓群の東端となった。

また、西山丘陵では、富山考古学会員西井龍儀氏によって多数の後期古墳群が発見されている。頭川城ヶ平の周囲だけでも、北東約 2km までに板屋谷内古墳群 A・B・C があり、南西 2km までに安房山古墳群、四十九古墳群、タチ山古墳群、ドウガヤチ古墳群、大寺古墳群 I・II がある。県内の他の横穴墓群の近くにも後期古墳群が存在するという例から見ても、当地域でも横穴墓群と後期古墳群の分布がほぼ一致すると言える。

頭川城ヶ平横穴墓群と谷をはさんで墓地があり、その崖の切り通し断面から火葬骨と土葬骨が出土している。また谷間の田は、須恵器・土師器が出土した頭川遺跡となっており、近辺にも集落跡と推定される遺跡が多数存在する。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1 / 50,000)

1. 頭川城ヶ平横穴群
2. 江道横穴群
3. 城ヶ平(馬場・赤丸)横穴群
4. 城ヶ平(加茂)横穴群
5. 板屋古墳群
6. 四十九古墳群
7. 柴野古墳群
8. 石塚遺跡
9. 頭川古墓跡

II. 調査に至るまで

遺跡は、富山県高岡市頭川城ヶ平1-1に所在する。当地には、以前から古墳状の地形が2ヶ所あり、地元では、男女冢・女王冢として伝承されていた。1955(昭和30)年に、東京国立博物館の指導のもと試掘調査が実施され、数点の須恵器・土師器が出土したが、内部主体が確認されないことや盛り土の形跡が認められないことから、古墳とは断定されないまま、当地は現在に至っている。

横穴墓群については、当地より西南約2kmの江道横穴墓群が西山丘陵地における横穴墓群の東端とされていたので頭川城ヶ平横穴墓群は、覆土のため外見上わからないこともあって、埋蔵文化財包蔵地の可能性があると推測しつつも、関心が薄い状況のままに開発計画区域内に入っていた。

昭和57年8月6日、日本海頭川鉱山山口産業(代表 山口吉次氏)の土砂採掘中に、第4号墓の玄室断面が露出し大量の人骨と須恵器1点が発見された。連絡を受けた高岡市教育委員会は、富山県教育委員会と山口氏との協議を重ね、山口氏には、第4号墓の調査及び周辺の確認調査が終わるまで土取工事を中断するというご協力をいただいた。

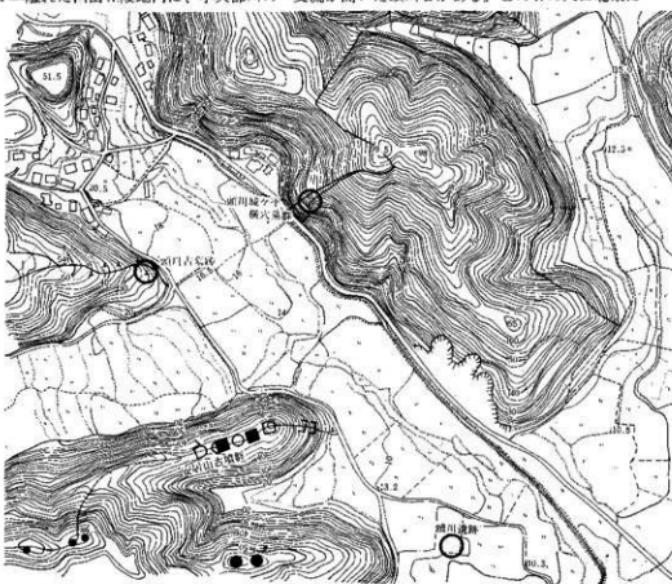
調査の実施にあたっては、高岡市教育委員会が調査主体となつたが、不時発見のため調査体制の不充分なことから富山県埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼した。また、富山医科薬科大学医学部助教授森沢佐蔵氏にお願いし、快諾をいただいた。さらに、富山考古学会の諸氏には、現地で指導と助言をあおいだ。関係各位に、紙面を借りて、改めて感謝申しあげる次第です。

III. 調査の概要

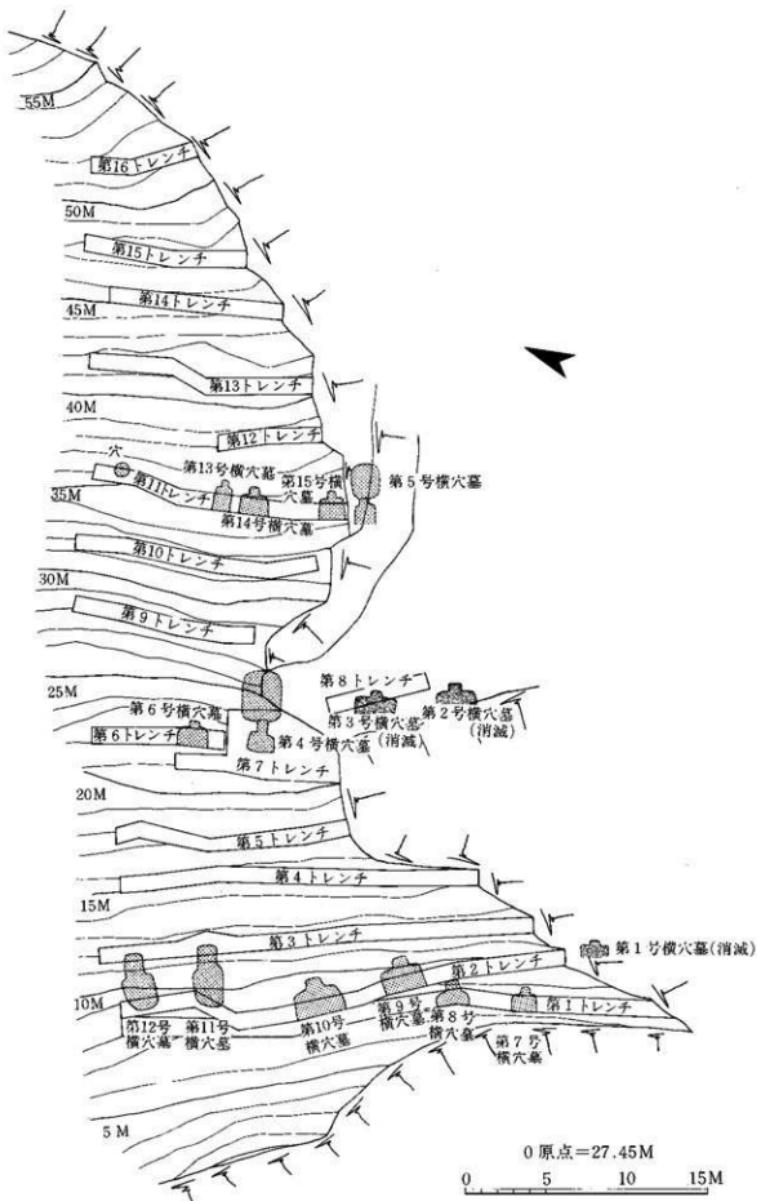
1. 遺跡の立地

高岡市街から北西へ約4km離れた西山丘陵地内に、小矢部川の一支流が開いた頭川谷がある。この谷の入口北東に標高90mの山があり、その南側の急傾斜面に、頭川城ヶ平横穴墓群が並んでいる。この山の谷をはさんだ向側には、北に標高40mの台地があり、頭川地区の墓地となっていて。その南に、標高50mの2つの小丘陵が突き出ていて、安居山古墳群4基と四十九古墳群7基が、尾根に並んでいる。

これらの山に開まれて頭川谷が開け、谷入口から北西200mに頭川の集落があり、谷間一帯は平均標高約15mのは場整備された水田である。



第2図 遺跡地形図 (1 / 10,000)



第3図 頭川城ケ平横穴墓群 発掘区及び概略配置図 (1/300)

2. 調査の経過と横穴墓のあり方

頭川城ヶ平第4号横穴墓（以下第4号と省略）の発見を契機に、周辺の横穴墓の分布状況を把握し、今後の保存対策を構することを目的として、調査は、昭和57年8月19日から同年9月16日まで実施し、実質25日間を要した。

第4号の調査については、玄室内に残っている覆土をふるいにかけ、骨片・副葬品の有無を点検し、残りの人骨の出土状況を記録しつつ、上層から順次採取した。最後に、前庭部から羨門・玄室までの断面を計測した。

周辺の調査については、地表の起伏をできるだけ明確にし、横穴墓の存在を推測するため、雑木類の伐採から開始した。それによって、適宜トレンチを設定し、試掘した。以下に、その概略を述べることとする。

頭川城ヶ平横穴墓群は、15基以上存在すると推定される。そのうち3基は、上砂採掘工事により消滅しているが、現在まで12基を確認している。これらは、その位置状況から、3群に分けることができる。第1群は、標高20mに並ぶ7基（1基消滅）であり、第2群は、標高50mに位置する4基（2基消滅）であり、第3群は、標高60m以上に存在する4基である（第3図）。

第1群は、3対に分けることができる。すなわち、第7号と第8号、第9号と第10号、第11号と第12号が、それぞれ対をなしている。第7号から第12号にかけて、緩やかな上り勾配となっている。第1号は消滅している。

第7号と第8号は、当横穴墓群の最下段にあり、第1トレンチで、第7号のドーム状渠道の上端と第8号の渠道下半部が確認された。両者は、3m程離れ、前庭部幅はともに約1.5mを計り、第4号と同規模である。

第9号と第10号は、第2トレンチで、ともに幅約3mの前庭部が2.5mの間隔をおいて現われた。この2基の前庭部は、当横穴墓群の中で最大のものであり、地山の整形も明確な前庭部である。横穴墓群の中心的存在であろう。

第11号と第12号は、第3トレンチで、幅1.5mの渠道のドーム状上端を2.5m離れて2基を確認した。また、第2トレンチで、前庭部が検出される。2基の前庭部は長く、第1トレンチまで続いている。前庭部と羨門の境には、地山に幾筋もの溝が切り込まれている。

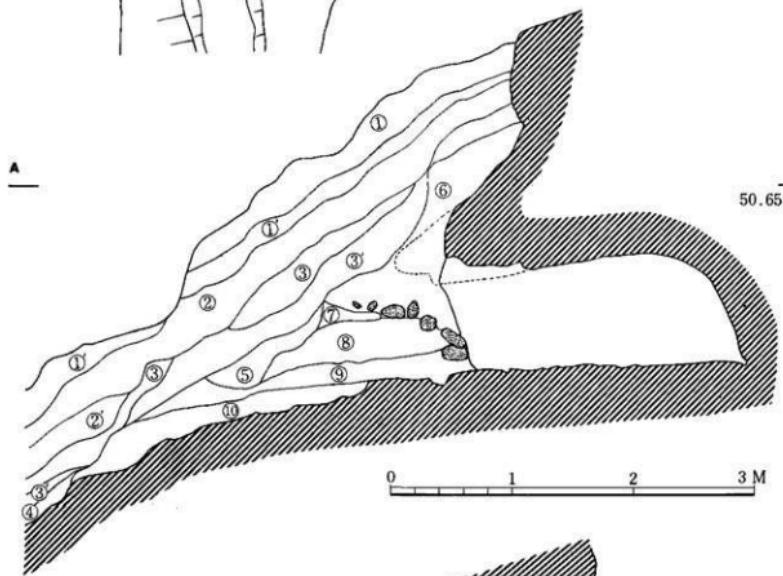
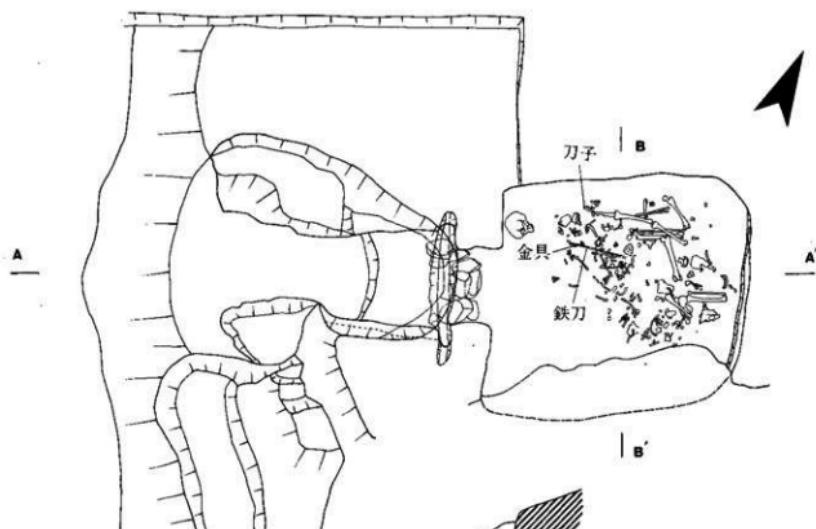
第2群については、2対に分けられる。すでに工事によって消滅した第2号と第3号、そして第4号と第6号である。おそらく、第2号から第6号にかけて、緩く上り傾斜となっていたと推定される。

第2号と第3号は、第8トレンチを設定し、深さ2mまで掘り下げたが、遺構は全く確認されず、数点の人骨を探取しただけであった。第4号と第6号は、2.5mの間隔で隣り合い、ともに同じ規模を有する。第4号については、詳細に後述するので、ここでは省略する。第6号は、第6トレンチで幅約2mの前庭部が検出される。

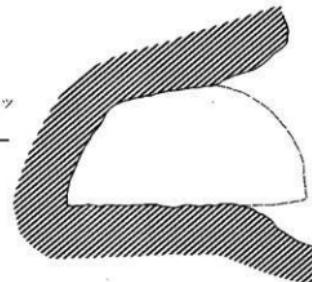
第3群は、2対に分けられる。1対は、第5号と第15号であり、もう1対は第13号と第14号である。第3群が存在する場所は、地表の覆土が厚く堆積し、地山を検出するのに2mの掘削を要した。また、覆土が工事のために擾乱されて固まっておらず、急傾斜でもあるので、充分な幅のあるトレンチの設定は困難なため、第3群相互の位置関係はやや不明である。第5号と第15号については、前者は、大半が工事で切断されていて、東南崖に玄室断面が露出し、玄室床には伸展葬の骨が認められる状況であり、後者は、第11トレンチの東南端に位置する。第13号と第14号は、第11トレンチで、ともに幅約1.5mの前庭部の下部が、1mの間をおいて並んでいる。また、第11トレンチの北西端に穴1ヶ所を検出しているが、その性格は現段階では不明である。

第13トレンチの中央部で、地表下50cmから、須恵器の平瓶1個が出土している（第5図17）。上方から流れ落ちたと推測されるので、第13トレンチ以上に、現在は未確認ではあるが、横穴墓または横穴墓に関する遺構の存在する可能性がある。以上の横穴群は、内部の保存状況が良好であり、2基1対を特徴とし、ほぼ15m程度の比高差をもって存在することが判明した。2基1対の性格解明や埋葬及び造墓の形態風習等の解明が、今後の課題である。保存については、横穴群は、さらに広がって存在すると予測されるので、北西地域における試掘調査も要求される状況である。

（逸見）



- | | |
|-------------------|-------------------|
| ①盛土 | ⑧茶灰白色砂層 |
| ①表土 | ⑨黒色土(地山ブロックを少し含む) |
| ②暗茶褐色土層 | ⑩⑪層まじりの灰白色砂層 |
| ②黒茶褐色土層 | |
| ③茶褐色土層 | |
| ③明茶褐色土層 | |
| ④灰白色砂層 | |
| ⑤黒褐色土層 | |
| ⑥灰白色砂層(地山ブロックを含む) | |
| ⑦黒色土まじりの灰白色砂層 | |



第4図 第4号横穴墓実測図 (1/40)

3. 第4号横穴墓（第4・5図、図版1・2・4・6・7）

第4号墓は、同横穴墓群の中段、南東部に西を向いて位置し標高50mを測る。同墓は、土取作業中に玄室南東部が開口し横穴墓群発見の契機となった。そのため南東側が1部破壊している。横穴墓は、保存状態が良く床面・側面・天井などに加工痕が鮮明に残る。

羨門は、発見当時開口しておらず砂岩（地山）の石塊により封鎖されていた。封鎖の状況は、羨門の床面より若干浮き上がった状況で石塊を積み上げられている。また、1段目と2段目の石塊では、2段目が前庭部側に積まれる。羨道部上層にみられる石塊は、天井部の落盤したものと考えられる。

遺物及び人骨は、玄室内に散乱した状態で検出され個体識別はむずかしい。また、人骨にまじり自然遺物（小動物等の骨）が発見された（図版4の19）。

構造（第4図、図版1・2）

前庭部は、幅1.5mで奥行き約1.8mを測り中央部が幅70cmで1段低くなり、両側はテラス状となる。羨道は、幅80cmで設けられ前庭部より1段高くなる。また、南壁には、幅20cm、深さ5cmの掘り込みを長さ約1mで2条設ける。

羨門部は、幅60cmと狭くなり封鎖用の溝（幅20cm、深さ10cm）が設けられており、板状のものにより封鎖するための施設と考えられる。天井は、羨門から玄室の一部にかけ落盤しており施設は確認できない。

玄室は、幅1.5m（推定）・奥行約2m・高さ95cmで南東側にやや張り出す長方形で奥壁はゆるく立ち上がるドーム形である。奥壁には、幅・深さとも約5cmの排水用の溝をめぐらす。この溝は、破壊された南東側にも設けられた可能性がある。また、天井は、奥が高く羨門部が低くなると推測される。

出土遺物（第5図1～16・18、図版4）

遺物には、須恵器長頸壺・鉄刀3・刀子4・刀の金具11の副葬品と小動物の骨などの自然遺物がある。発見当時に遺物・人骨の一部（南東側）がすでに移動しており玄室内から検出した遺物は、鉄刀1・刀子1・金具1であった。

また、移動した遺物の中でも長頸壺・鉄刀2と人骨の一部は、玄室南側の羨門付近にあったよう追葬時にかたづけられていた可能性をもつ。玄室内から発見された遺物は、玄室中央部に散乱する人骨にまじり出土しており、中には、亀の骨板・カニの手などもみられ、副葬されたものである可能性をもつ。

鉄刀15・16は、いずれも厚身で幅広のがっしりとした作りで素文の鋒が、鞘口金具・縁金具により止められている。

14は、やや細身の作りで縁金具が施される。また刀身には、布が付着する。

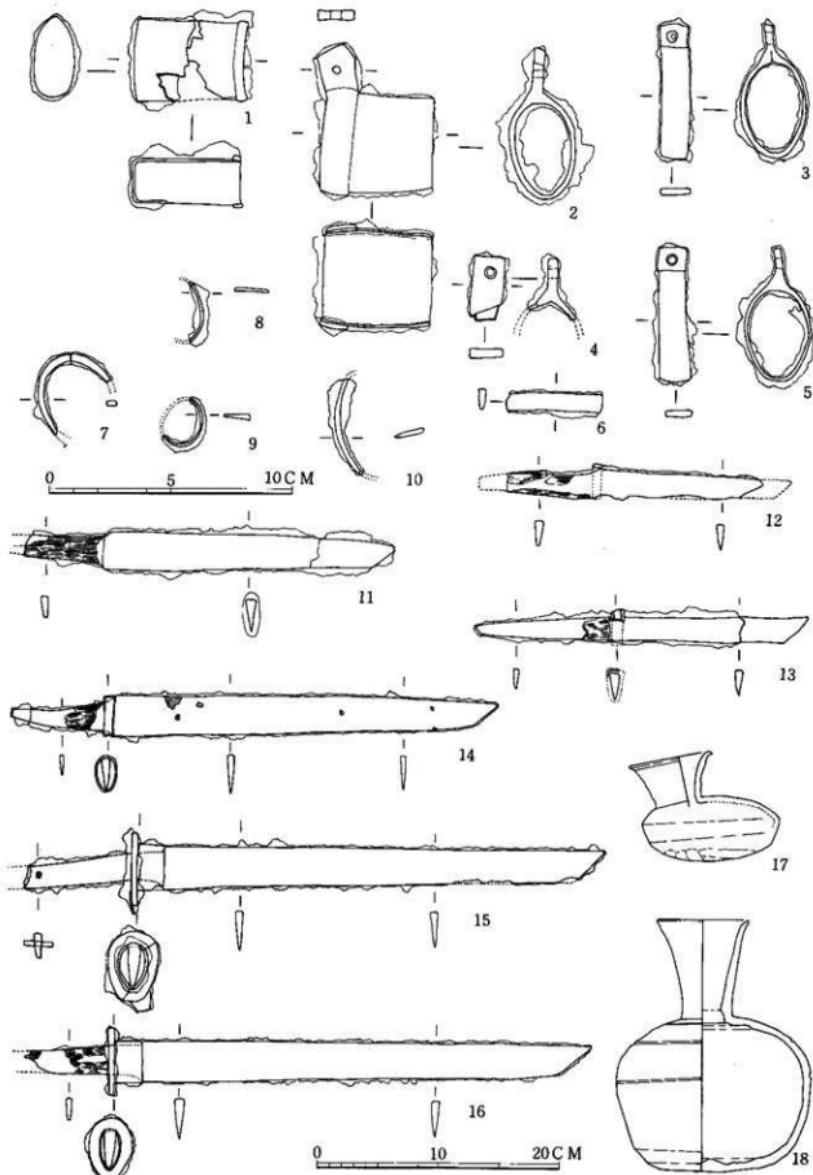
15は、柄頭と考えられる1と鞘口の2、足金物の2～5、責金具6～10がある。柄頭・鞘口・足金物は、鉄地金に漆を施す。これらの金具は、大形のものが鉄刀の金具・小形のものは刀子の金具と推測される。

刀子は、細身で柄の長い12・13と幅広のしっかりした作りの11がある。11は、鞘部と考えられる木質が残り、漆が施されている。また、6は、刀子の先端の破片である。

須恵器は、細首の長頸壺で体部がつぶれた球状となる。外面は、丁寧にナデが施され、底面はヘラケズリされる。また、小片は、羨門・玄室の床面から出土しており打ち欠いて副葬されたと考えられる。

自然遺物（図版4の19）は、玄室内から多数出土しているが中で種類の確認ができるものは、亀の甲の骨板1体分、モクズガニの一種、ニホンマイマイ・ヤマタニシ・食虫目の一一種があり、そのほかに小動物の脊椎骨・肋骨などが出土している。

第4号横穴墓の開口について、玄室内に散乱して老年の男1体・壮年の女1体・子供1体の3体分と青年の男2体が移動した人骨から確認され計5体の人骨を検出した。追葬は、どの人骨であるかは出土状況からは断定できないが、羨門の封鎖状況から3回以上の追葬が行なわれたことが推測される。1回は、羨門部の封鎖用の溝を利用したと思われる長頸壺が打ち欠かれて副葬されたと考えられる。2回目は、羨門部が土砂により埋った時に砂岩の石塊により封鎖さ



第5図 遺物実測図 1~13(1/2)・14~18(1/4)

れた時で、すでに狭道部が一部落成していたと推測される。3回目は、1段目の石塊を積み上げた上に積上る封鎖石塊で、1段目の石塊の前方に積む。この封鎖は9層堆積後に積上げられている。また、一定期間狭門が開口していたと思われ、玄室内からカタツムリ（ニホンマイマイ・ヤマタニシ）が多数みつかっていることからも裏付けされる。このことから追葬は、少なくとも3回行なわれたと推測される。

4. 頭川城ヶ平4号横穴墓の年代について（第6図）

県下にみられる横穴墓群は、大きく3グループに分けられ、水見地方〔水見高等学校歴史ク1964〕を中心とする加納横穴墓群56基坂津横穴墓群36基・脇方横穴墓群7基・阿尾城山横穴墓群10基・阿尾瀬戸ヶ谷内横穴墓群3基・熊無新保横穴墓群2基の計124基と小矢部川の左岸、小矢部・福岡・高岡〔古岡1972〕にかけての丘陵にみられる桜町横穴墓群11基・田川横穴墓群（不明）・城ヶ平横穴墓群赤丸・馬場地内52基・加茂地内9基・江道横穴墓群15基以上・頭川城ヶ平横穴墓群15基以上の計103基と富山市呉羽丘陵にみられる番神山横穴墓群8基・金屋陣の穴横穴墓群20基以上の計28基の3群である。横穴墓は、県西部に多く227基が存在し、県東部では呉羽丘陵にみられる28基のみである。このことは、横穴墓を作るための地質の分布（砂岩層の分布）とはほぼ一致している。また、県下の横穴墓は、十分な調査が少なく年代・形状の変化等を知ることはできないが、富山市金屋陣の穴横穴墓群〔藤田1976〕・高岡市江道横穴墓群〔高瀬他1957〕・小矢都市桜町墓穴墓群〔渕・西井1951〕、北陸最大の規模をもつ石川県法皇山横穴墓群〔田崎他1951〕など内容のあきらかにされている横穴墓群の調査成果をもとに年代を考えてみたい。

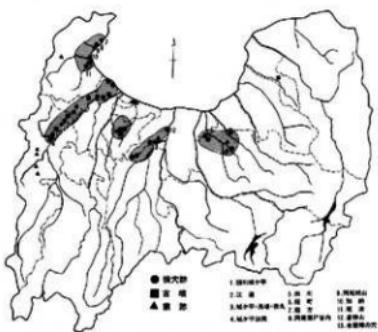
法皇山横穴墓群における横穴墓の形態の変化は、I期（6c末～7c初）ドーム形で前室をもつ。II期（7c初～後半）アーチ形で前室をもつもの。III期（7c後半～末）アーチ形で狭道の短いもので3期に分けられている。しかし、富山県下では、前室をもつ横穴墓は発見されておらず概に比定できない。また、同様の形態を呈しながらも、ドーム形・アーチ形が共存すると考えられる。県下で6c末～7cに比定される横穴墓群は、金屋陣の穴横穴墓群がある。形状は、前部が長く、狭道がしっかりと作られるドーム形のものである。7c中ごろ～後半には、小矢部都市桜町の横穴墓群がある。形状は、前部が短く広いもので狭道が短かくアーチ形になる。また、玄室内に排水用の溝などの施設を作るもので、法皇山横穴墓群においてもII期には整備されたものが多く棺台などの施設を設けるものが多い。また、高岡市江道横穴墓群内の4号・5号にみられる石柱により狭門を作るものや、狭門部の外側を段状に作るものなども同様の時期と考える。7c後半から末にかけての横穴は、県下でははっきりとした例はないが、水見市坂津・加納横穴墓群内の狭道・狭門が短かくはっきりしないタイプのものがあり、同期にあたるかもしれない。

一方、頭川城ヶ平横穴墓群4号墓は、ドーム形で狭道が短かく、前部が短かく広いもので、平面形は桜町1号・2号・陣の穴7号・江道2号・3号が同様の形態となる。

しかし、桜町1号・2号はアーチ形でその他のものと異なる。

頭川4号では、玄室・狭門の床面から長頸壺（7c後半）が出土し、初期の副葬品と考えられ、横穴もほぼ同時期に作られたと推測される。このことから、7c後半に位置づけたい。また、富山県下では、ドーム形・アーチ形の両者が共存し横穴墓群を形成すると思われるこの違いは、造墓者の違いによる変化かもしれない。

また、県下では、古墳時代後期の群集墳と古窯跡が近辺で発見され、3～4ヶ所のグループとなり地域集団のありかたを示すと考えられている〔藤田1981〕。この小矢部川



第6図 県内の主要古墳跡(6～7C)の分布

左岸の地域でも近年西井龍儀氏により 200基以上の古墳の存在が指示されており、横穴墓造墓集団と丘陵上に存する古墳群造墓集団との関係が問題となり、また、同地域においても同様に地域集団と古墳群のありかたを位置づけることが今後の課題となろう。

(酒井)

IV. ま と め

前章まで述べたことと、問題点を要約しまとめとする。

1. 須川城ヶ平横穴墓群は、小矢部川左岸に連なる丘陵の西側斜面に位置し15基（3基消滅）以上の横穴墓から形成され、山腹北側に広がると思われる。
2. 横穴墓は、大きく3群に分かれて山腹に3段に並び2基が1単位として造られる。下段7基（1基消滅）、中段4基（2基消滅）、上段4基が10~15mの比高差をもち配置される。また、同一山腹における横穴墓の配置・単位等を単純な形で示す。
3. 第4号横穴墓では、玄室内から老年の男性1体、壮年の女性1体、5~6才の子供1体、玄室内から移動した人骨からは、青年の男性2体の計5体が確認された。また、副葬品としては、須恵器長頸壺1、鉄刀3、刀子4と金具11個が検出され、7c後半に位置づけられる。
4. 現存する12基は、1基（5号）で天井の落盤がみられるが盗掘・擾乱をうけておらず良好な遺存状況を示す。このことから県下に現存する横穴墓群の中でも極めて保存状況が良いと思われる。
5. 小矢部川左岸の高岡・福岡・小矢部に至る丘陵上には、後期古墳群と横穴墓群の両者が同一地内に混在または、近接してみとめられる。それは、それぞれの時期や被葬者の性格の違いを考えるためにあしかかりとなる。これは、地域集団の解明、古墳群のあり方、変遷を示すと考えられる。しかし、詳細は不明であり今後の課題としたい。

引用・参考文献

- イ 池上 悟 1980 「横穴墓」『考古学ライブラリー6』 ニューサイエンス社
石川県立郷土資料館編 1981 「須恵器」須恵器展パンフレット
- オ 大村正之 1923 「加納横穴群」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第2号
大村正之 1931 「吳羽山古墳横穴群」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第11号
岡崎卯一 1967 「富山市安養坊番神山の横穴墓」『大境』富山考古学会会誌
岡崎卯一 1968 「富山市安養坊横穴第7号墓の調査」『大境』富山考古学会会誌
- コ 後藤守一 1928 「原史時代の武器と武具」『考古学講座』第1巻 雄山閣
- タ 高瀬重雄他 1957 「高岡市江道横穴古墳群調査報告書」高岡市史料編纂委員会
高堀勝喜・吉岡康輔 1965 「古墳文化の地域性—北陸一」『日本の考古学W』河出書房
- ハ 梶本澄夫・田嶋明人・高堀勝喜・湯尻修平・新家秀夫・梶幸夫 1971 「法皇山横穴古墳群」加賀市教育委員会
林 貴太郎 1924 「熊無村横穴古墳」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第10号
- ヒ 水見高等学校歴史クラブ 1964 「富山県水見地方考古学遺跡と遺物」
- フ 深井三郎 1966 「水見海岸・二上山学術調査報告」
- 藤田富士夫 1976 「富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書」富山市教育委員会
藤田富士夫 1978 「伊弥領国造に関する一考察」『越中史蹟72号』
- 藤田富士夫 1981 「富山県における群集墳期の古墳文化—古代氏族の勢力に関連して—」『越中史蹟76号』
- 古岡英明 1972 「古墳時代」『富山県史—考古編』
- ミ 渡 農・西井龍儀 1971 「小矢部市のあけぼの」『小矢部市史』
- ワ 和田一郎 1958 「古墳文化の時代」『高岡市史』上巻第2編

頭川城ヶ平横穴墓群及び頭川古墓出土人骨について

富山医科薬科大学医学部第一解剖学教室

森沢佐彦・松田健史

はじめに

富山県高岡市頭川城ヶ平1-1地内の丘陵地の土取作業中、頭川城ヶ平横穴墓群のうち、第4号横穴墓の玄室が開口し、移動された土中より人骨が発見された。

昭和57年8月19日、20日の両日、富山県教育委員会、高岡市教育委員会が主体となり、第4号横穴墓の調査を中心として行なわれた。第4号横穴墓の保存状態は玄室奥で良好であり、天井、壁面より草木類の根が床面に達している。これらの多数の根を除去し、人骨の出土状態をみると、人骨の一部分が床面上の堆積土(約10cm)より白い粉状の塊りを伴って露出している。この玄室奥の床面上の堆積土の衣層および下層より多数個体の保存状態良好な部分骨が散乱状態で出土した。その後の調査により第4号横穴墓の東南のトレントの深さ1m~2mから第2号又は第3号横穴墓の人骨が出土し、さらに第5号横穴墓およびこの横穴墓群近辺の頭川古墓よりそれぞれ人骨が採集されている。これらの人骨の調査を依頼されたのでおもに人骨の個体数について概略を報告し、各人骨の死亡経過年代については今後稿を改めてみたい。なお、人骨の個体数は性や年令に伴う人骨の特徴について、重複する部分骨の比較、左右側の個体識別などにより推定したが、左右側の観察可能な人骨の所見は原則として左側のみを記載する。

1. 第2号・第3号横穴墓出土人骨

前頭骨、頭頂骨左右、後頭骨の各一部、下顎骨1個、肋骨右1片、胸椎2個、上腕骨右1個、第三中足骨左1個が出土している。

これらの人骨の保存状態は良好であり、人骨表面の腐食が少ない。骨表面の色は黄緑色または褐色を呈し、表面には根毛による網目状の黒色部が認められる。また、小動物等による咬痕や生前の損傷と推定される痕跡は認められない。とくに、下顎骨、胸椎、第三中足骨はほぼ完全形である。

前頭骨は前頭鱗、後頭骨は後頭鱗、左右の頭頂骨のいずれも一部分であるが、主要縫合部の形態は一致し、同一個体の頭蓋冠の一部を構成する。これらの頭蓋骨の内・外板は厚く、頸部である。冠状・矢状・人字縫合の密着は残存部の内・外板ともに認められない。頭頂結節は強く、頭頂孔は両側に各1個認められる。頭蓋内面観では中硬膜動脈溝、上矢状洞溝は浅く、クモ膜颗粒小窓は少ないと。

下顎骨は左の下顎角と、右の筋突起の一部を欠損するが、ほぼ完全形をなす。下顎骨は全体として大きく、高い、広い。下顎体厚は中等度である。下顎体は高く、歯槽縁は下顎底にはほぼ平行である。下顎枝は広く、高い。下顎枝後縁の後方への傾斜は弱い(下顎枝角119度)。下顎角は強く外弯する。咬筋粗面、翼尖筋粗面は粗造である。下顎骨の歯槽はすべて存在し、歯槽の萎縮は認められない。歯槽中には永久歯11本(7、6、5、4、3、2、1、7、8)あり、それらの永久歯の吸収度はMartinの2度~3度である。これらの永久歯の歯頭部にはわずかに歯石が認められ、そのうち永久歯2本(7、8)の歯冠にはう蝕が認められる。

右の上腕骨は遠位端を含む約 $\frac{1}{2}$ である。骨幹は太く(骨幹最小周63mm)、遠位端も大きい(下端幅61mm)。遠位の骨端線は消失している。

胸椎は第3又は第4胸椎1個と第12胸椎1個であり、骨核はいずれも密着完結している。左の第三中足骨は骨体と骨頭が密着完結している。右の肋骨は肋骨体の一部のみ残存するが、肋骨体は太い。

以上のように、第2号又は第3号横穴墓出土人骨は老年期の男性骨で、1個体分の可能性がある。

2. 第4号横穴墓出土人骨

この人骨は玄室奥の床面上の堆積土中(衣層・下層)および移動された土中(開口時に南東の壁面とともに南東の床

面堆積土の一部、玄室奥側の羨門付近の堆積土は移動したと考えられる)より出土している。

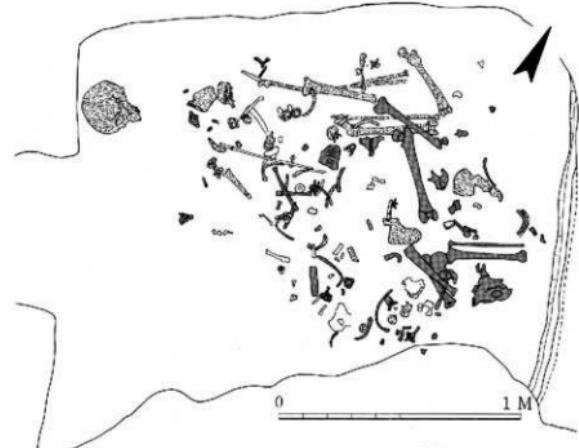
この人骨の保存状態は多数個体の部分骨が比較的良好な状態で保存されている。骨表面の腐食は少なく、各部分骨は全形をなすものが多い。骨表面の色調は淡褐色または褐色を呈する。また、小動物等による咬食や生前の損傷と推定される痕跡は認められない。

この人骨の個体数はおもに成長に伴う人骨の特徴から、成人骨2個体分と未成人骨3個体分と考えられる。以下年齢順に第4-1号、第4-2号、第4-3号、第4-4号、第4-5号人骨と記載する。そのうち、玄室奥の堆積土表層より出土の成人骨2個体(第4-1号、第4-2号人骨)は第7図、未成人骨2個体(第4-3号、第4-5号人骨)は第8図のような分布を示す。また、未成人骨1個体(第4-4号人骨)はおもに移動された土中より出土している。

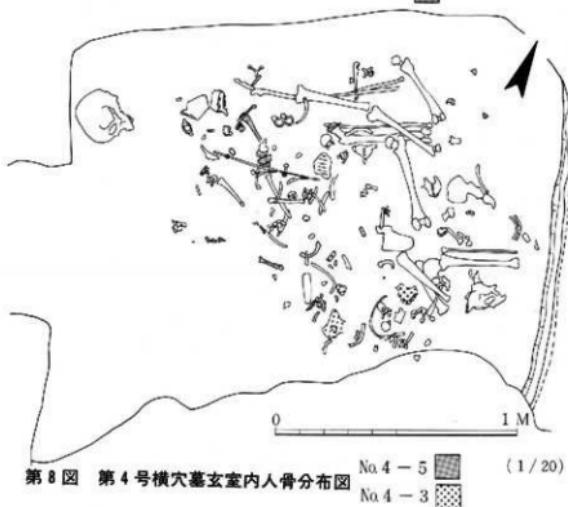
すなわち、第4号横穴墓の玄室奥は開口前の状態をよく保存されているが、各人骨の部分骨はほとんど自然位の状態では検出できず多数個体の部分骨が散乱状態で出土している。したがって、各人骨の頭位、埋葬姿勢などの埋葬当時の詳細な埋葬様式は不明である。また、追加葬としてもその順序はこの人骨の出土状態から不明である。

第4-1号人骨

玄室内出土人骨として、頭蓋、下頸骨、頸椎5個、胸椎12個、腰椎3個、尾椎3個、胸骨柄、肋骨頭右8個、同左10個、左右の鎖骨、肩甲骨、尺骨、桡骨、左の月状骨、大菱形骨、右の有頭骨、左右の有鉤骨、右の第一、第二、第三、第五中手骨、左の第二、第四、第五中手骨、左右不明な手の基節骨6個、同中節骨6個、同末節骨4個、左右の寛骨、大脛骨、腓骨、膝蓋骨、右の胫骨、左右の舟状骨、左の距骨、踵骨、立方骨、内側楔状骨、外側楔状骨、第一~第四中



第7図 第4号横穴墓玄室内人骨の分布図
No.4-1 (1/20)
No.4-2



第8図 第4号横穴墓玄室内人骨分布図
No.4-5 (1/20)
No.4-3

足骨、左右不明な足の基節骨5個、同中節骨1個、同末節骨1個が出土している。また、移動された土中より、腰椎2個、仙骨、肋骨頭左2個、左右の上腕骨、左の胫骨、右の踵骨が出土している。

これらの部分骨はほぼ全身の骨であり、年齢や性に伴う各骨の特徴が左右側で類似し、各骨の連結もよく適合する。また、これらの骨は重複しない。すなわち、年齢（成長）に伴うおもな特徴をあげると、主要な頭蓋縫合の癒着は冠状縫合の泉門部・側頭部、矢状縫合の泉門部・頂溝部・頭頂孔間部・三角部、ラムダ縫合の三角部の各外板とも完結している。下顎枝後縁は後方へ強く傾斜する（下顎枝角約130度）。上頸骨、下頸骨の歯槽はすべて存在し、右では第一大臼歯部、左では第二大臼歯部の歯槽は上・下顎とも萎縮を認める。上頸骨歯槽中には永久歯6本（6、5I、4I、4S、5S、6S）、下頸骨歯槽中には永久歯6本（7、7I、6S、4I、4S、8S）あり、それらの永久歯の咬耗度はMartinの1度～2度である。これらの永久歯の歯預部には歯石が認められ、そのうち永久歯7本（8、4I、4S、5S、7I、8I）の歯冠にはう蝕が認められる。体幹骨、体肢骨の骨端、骨核は骨体と癒着完結している。また、椎体辺縁には骨棘が認められる。椎骨の上・下関節突起、仙骨の上関節突起など全身骨の骨端の関節面辺縁には異常な骨増殖が認められる。また、各骨は部分的にも全体的にも大きく、長骨の骨幹も太い（頭蓋水平周529mm、下顎角幅100mm、肩甲骨形態的長100mm、上腕骨骨体最小周67mm、尺骨周37mm、大腿骨骨体中央周93mm、胫骨骨体周84mm）。筋付着部は広く、粗造である。肩間の膨隆は中等であるが、後頭隆起は強く膨隆する。下顎角は強く外弯し、下顎角前切痕が左右とも認められる。寛骨の大坐骨切痕は狭い。骨盤上口の形は心臓形で、恥骨下角は狭い（約40度）。

以上のように、第4-1号人骨は熟年中期～老年初期の男性骨1個体分と考える。この人骨の頭蓋上面觀は類卵円形で、頭蓋長幅示数は過長頭型（133/194=68.6）を示す。コルマン氏上顎示数は狭上顎型（81/136=59.6）を示す。左大腿骨最大長（418mm）よりピアソン式の推定身長値は約159.9cmである。また、仙骨の腰椎化が認められる。

第4-2号人骨

玄室内出土人骨として、頭蓋、下顎骨、頭椎7個、胸椎6個、腰椎2個、仙骨、胸骨体、肋骨頭右4個、同左10個、左の肩甲骨、上腕骨、尺骨、桡骨、右の月状骨、左の有頭骨、右の第四、第五中手骨、左の第二中手骨、左右不明な手の基節骨4個、末節骨1個、右の寛骨、左右の大脛骨、胫骨、腓骨、右の膝蓋骨、左右の距骨、蹠骨、右の中間楔状骨、左の立方骨、左右の第一、第五中足骨、右の第三、第四中足骨、左の第二中足骨および左右不明な足の基節骨3個が出土している。また、移動された土中より、胸椎6個、腰椎3個、胸骨柄、肋骨頭右5個、同左3個、左右の鎖骨、右の肩甲骨、上腕骨、尺骨、桡骨、左の第一、第三中手骨、手の基節骨1個、右の寛骨、左の膝蓋骨が出土する。

これらの部分骨はほぼ全身の骨であり、年齢や性に伴う各骨の特徴は左右側で類似し、各骨の連結もよく適合する。すなわち、年齢（成長）に伴うおもな特徴をあげると、蝶後頭軟骨結合は癒着完結するが、頭蓋縫合の癒着は内・外板ともに認められない。下顎枝後縁の後方への傾斜は弱い（下顎枝角約125度）。第三大臼歯は上・下顎歯とも未萌出である。その他の歯槽は開口し、上頸歯槽中には永久歯4本（6I、6S、5S、7S）、下頸歯槽中には永久歯4本（7I、6S、5S、7S）あり、これらの永久歯の咬耗度はMartinの1度である。歯槽の萎縮や歯石は認められない。永久歯3本（6I、7I、7S）にはう蝕が認められる。体幹骨、体肢骨の骨端、骨核は骨体と部分的に癒着するが、骨端線は完全に消失していない。また、各骨は第4-1号人骨と比べ小さく、長骨の骨幹も細い（頭蓋水平周約490mm、下顎角幅92mm、肩甲骨形態的長83mm、上腕骨骨体最小周50mm、尺骨周33mm、大腿骨骨体中央周71mm、胫骨骨体周65mm）。各骨の筋付着部は狭く、粗面の起伏は少ない。肩間の膨隆は弱い。外後頭結節は弱いが、後頭隆起はやや強く膨隆する。下顎角前切痕は浅い。寛骨の大坐骨切痕はやや広い。骨盤上口の形は横楕円形で、恥骨下角は広い（約47度）。

以上のことから、第4-2号人骨は壮年初期の女性骨1個体分と考える。この人骨のコルマン上顎示数は中上顎型（64/126=50.8）を示す。左大腿骨最大長（374mm）よりピアソン式の推定身長値は約145.6cmである。この人骨の胫骨

下端前面には下関節面の前方延長面（いわゆる踏面）が認められる。

第4-3号人骨・第4-4号人骨

これらの人骨は少年期または青年期の特徴を有する人骨である。玄室内より、蝶形骨体、後頭鱗、後頭骨底部、左右の頭頂骨、側頭骨、右の鼻骨、胸椎2個、右の腸骨と坐骨、左の腸骨などが出土している。また、ほぼ同年齢に属する人骨は移動された土中より、左右の上顎骨と頸骨、前頭骨、下顎骨、頸椎1個、胸椎7個、腰椎5個、仙椎3個、肋骨頭右5個、同左7個、左右の鎖骨、左の肩甲骨、左右の上腕骨、尺骨、桡骨、腸骨、恥骨、坐骨、大腸骨、膝蓋骨、胫骨、腓骨、腓骨が出土する。そのうち、第一仙椎、右の上腕骨、左右の腸骨、坐骨、右の恥骨、左右の大腸骨、胫骨は2個体分ある。

頭蓋骨は縫合部で分離し出すが、縫合部の形態より明らかに同一個体である。頭蓋縫合や蝶後頭軟骨結合の癒着は認められない。上顎の歯槽は左右の第三大臼歛部で閉鎖しており、第三大臼歛は未萌出である。その他の上顎歯槽はすべて開存し、そのうち永久歯1本（I6）が歯槽中にみられ、その歯冠の咬耗はわずかである（Martinの1度）。頭蓋は大きく（頭蓋水平周約520mm）、外後頭結節の突出は弱いが、後頭降起は中等度またはやや強く隆起する。

また、椎骨は大きいが、椎体は低い。椎弓と椎体は癒着するが棘突起、横突起の尖端の骨核はこれらの突起より遊離している。左右の尺骨肘頭には部分的に骨端線が認められる。体肢骨の骨端は骨幹より遊離している。すなわち、2個体分の人骨の大きさには大小関係が認められる。

以上のことから、頭蓋、下顎骨および体幹骨、体肢骨の大部分は同一個体で青年期の男性骨（第4-3号人骨）と思われる（大腸骨幹長右366mm、腸骨幅右128mm）、重複のみられる部分骨のうち、きやしゃな1個体は性別不明な少年後期～青年前期の人骨（第4-4号人骨）と思われる（腸骨幅左105mm）。

第4-5号人骨

この人骨はすべて玄室内より、ほぼ全身の部分骨が出土する。すなわち、下顎骨は下顎体部であるが、下顎結合は歯槽部でわずかに遊離線が認められる。歯槽中の乳歯は4本（E、M、I1、I2）あり、すべて萌出する。また、X線像により、歯槽内には未萌出の永久歯3本（E、M、I2、I3）が観察され、歯冠のみが形成している。椎骨の左右の椎弓は癒着するが、椎体から遊離する。体肢骨の両骨端は骨幹より遊離している。長骨はいずれも骨幹が細く、小さい（上腕骨幹長右104mm、尺骨左97mm、大腸骨右144mm、腸骨左123mm、肩甲骨幅左44mm、腸骨幅左64mm）。

以上のことから、この人骨は性別不明な幼年後期の未成人骨と思われる。

3. 第5号横穴墓出土人骨

この横穴墓より採集された人骨は左の頭頂骨、後頭鱗の一部、左の肩甲骨の一部、左の桡骨である。これらの骨表面の色調は淡褐色であるが、濃淡の緑変部も認められる。咬耗などの痕跡はみられない。後頭鱗は左の頭頂骨とラムダ縫合外下部で合致する。内板・外板の骨質は薄い。頭頂骨近縁の形態から、主要な頭蓋縫合の癒着はないと思われる。肩甲骨は関節窓の上半分と烏口突起を含む外鶲角の一節であり、烏口突起は完全に癒着完了している。桡骨は両骨端と骨幹とが癒着するが、それらの骨端線は外表面より一部認められる。

これらの人骨はいずれもきやしゃであり、青年期または壮年期の女性骨と考えられる。

4. 頭川古墓出土人骨

この古墓より採集された人骨は左の肩甲骨、右の上腕骨、同尺骨、手の基節骨、右の腓骨各1個と右の桡骨2個および肋骨4片である。すなわち、右の桡骨、同上腕骨、基節骨、肋骨は頗る骨端線も消失していることから成人の男性骨と思われる。他の右の桡骨、同尺骨はいずれもきやしゃであり、同一個体の可能性がある。破損のため全貌をつかみえないが、少なくとも桡骨頭は骨幹より完全に遊離することから、性別不明な未成人骨の可能性がある。

なお、頭川古墓出土人骨の色調は淡褐色で、淡緑色または白色の領域が認められ、2個体の右桡骨体および1個体

の右尺骨の骨間縁、同腓骨体の表面には齧歯類のような小動物によると思われる咬痕が多数みられる。

ま と め

頭川城ヶ平横穴墓群のうち、第2号・第3号横穴墓、第4号横穴墓、第5号横穴墓および頭川古墓出土の人骨について、おもに個体数を検討したので以下にまとめる。

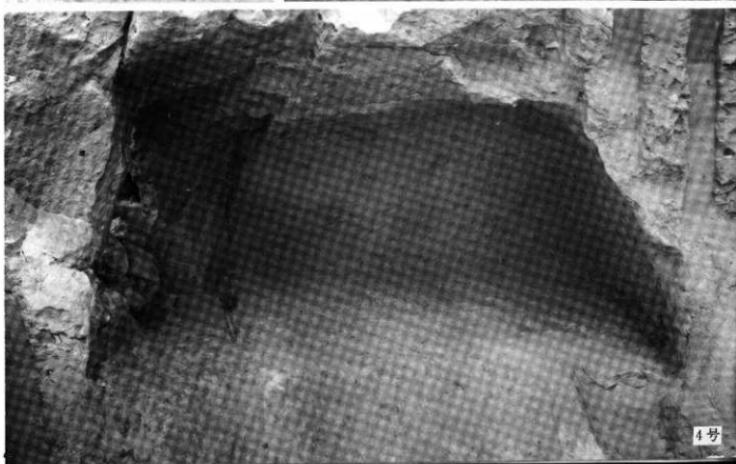
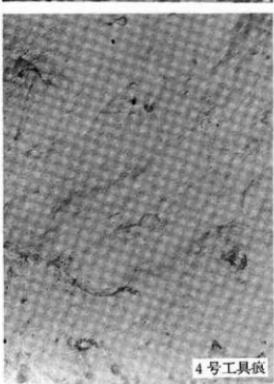
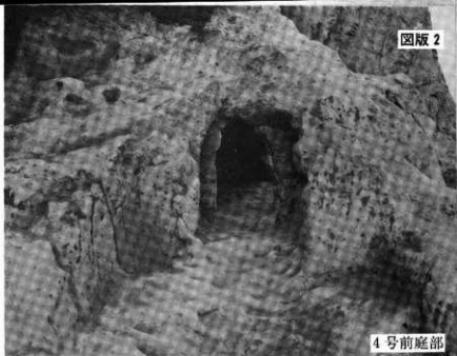
1. 各横穴墓および古墓出土人骨の個体数は1)第2号・第3号横穴墓より老年期男性骨1個体分、2)第4号横穴墓より老年期～老年初期の男性骨1個体(第4-1号)、壮年初期の女性骨1個体(第4-2号)、青年期男性骨1個体(第4-3号)、性別不別な少年後期～青年前期の人骨1個体(第4-4号)、幼年後期の人骨(第4-5号)の合計5個体分、3)第5号横穴墓より青年期～壮年期の女性骨1個体分、4)頭川古墓より成人の男性骨1個体、性別不明な未成人骨(少年期～青年期)1個体の合計2個体分と思われる。
2. 第4号横穴墓の玄室奥は開口前の状態をよく保存している。個体別に各人骨の出土状態をみると、いずれも散乱状態で出土しており、…次埋葬と推定されるが、埋葬様式や追加葬の有無、その順序は不明である。また、第4号横穴墓出土の人骨の表面には小動物による咬痕がみられない(頭川古墓出土人骨にみられる)。
3. 第4号横穴墓出土人骨の頭蓋上面観は頸卵円形で、頭蓋長幅示数は過長頭型を示す(第4-1号)。コルマン氏上面示数は枕上頭型(第4-1号)または中上頭型(第4-2号)を示す。
4. 第4号横穴墓出土人骨の頭蓋はいずれも後頸隆起の膨隆がやや強い(第4-1号、第4-2号、第4-3号)。
5. 第4号横穴墓人の身長は大脛骨最大長より、男性では約159.9cm(第4-1号)、女性では約145.6cm(第4-2号)と推定される。
6. 第4号横穴墓出土の女性と推定される腰骨の下端前面には蹲踞の習慣によると思われる小関節面がある(第4-2号)。
7. 頭川横穴墓群出土人骨の病変として、う蝕(第2・3号、第4-1号、第4-2号)や歯石(第2・3号、第4-1号)がみられ、第4号横穴墓出土の男性骨1個体には全身骨の関節面辺縁に異常な骨増殖が認められる(第4-1号)。

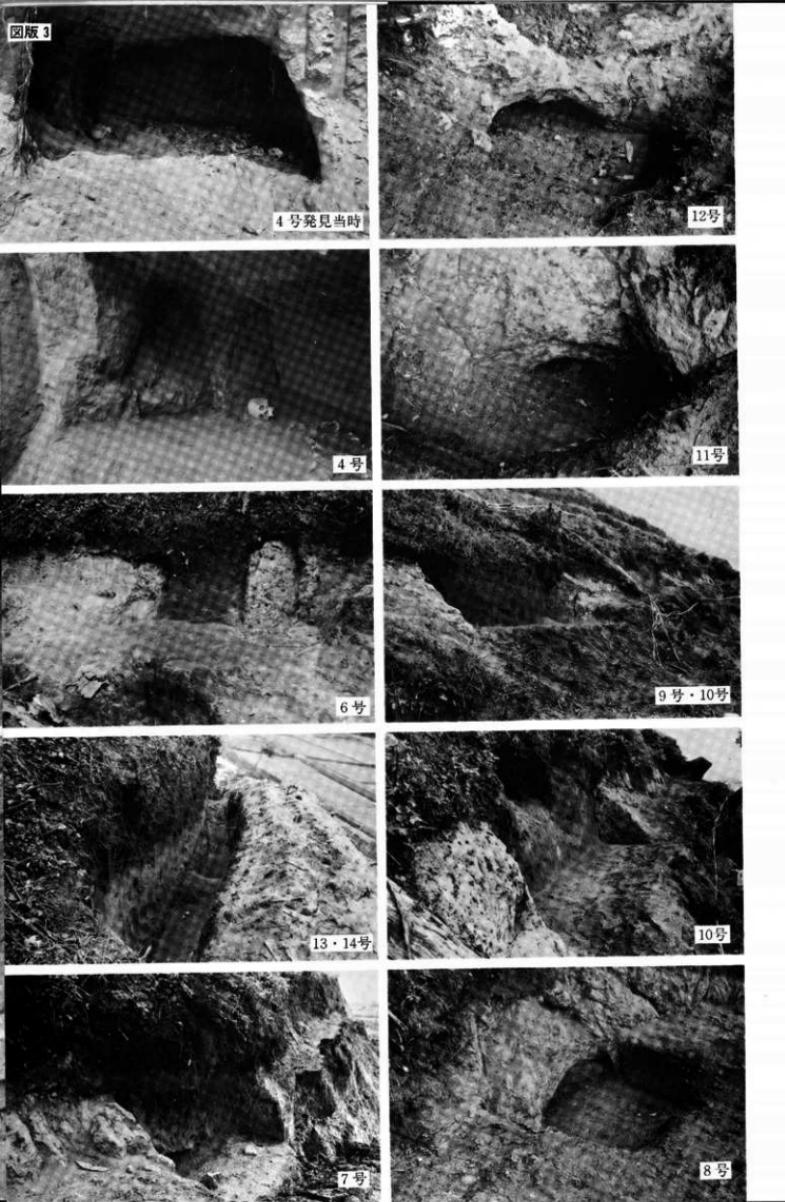
参 考 文 献

- 城一郎 古墳時代日本人人骨の人類学的研究、人類学報、1：1～334、1938。
- Martin, R. & Saller, K. Lehrbuch der Anthropologie, Bd. 1-2, 429-597, 1005-1477, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松田健史 石川県鶴来町一閑院近郊より出土せる家形石棺内人骨の形質人類学的研究、金沢大学医学部解剖学教室業績 第62冊、159～190、1960。
- 松田健史 福井県福井市足羽公園より出土せる舟型石棺内人骨の形質人類学的研究、同上誌 第62冊、191～225 1960。
- 松田健史 森沢佐歳他 一見古代人骨観を呈する白骨の鑑定例、法医学の実際と研究、23：81～100、1980。
- 森沢佐歳 日本古墳人頭蓋形質の地方差について、新潟医会誌 90：32～47、1976。
- 森沢佐歳 松田健史他 北陸日本人下顎骨の年齢差について—20才代、30才代、40才代の比較—、人類誌、89：439～456 1981。
- 森沢佐歳 北陸日本人下顎骨の男女差について、新潟医会誌、95：669～675、1981。

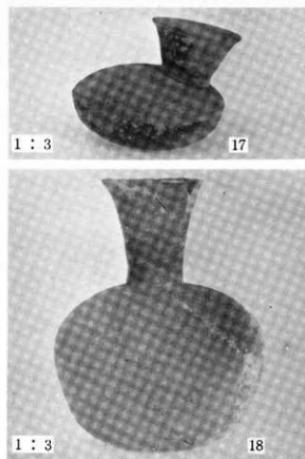
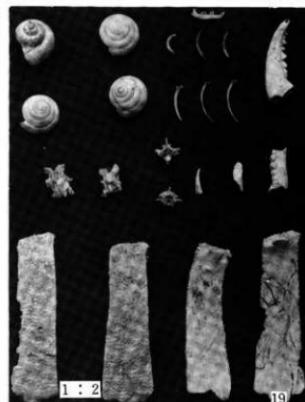
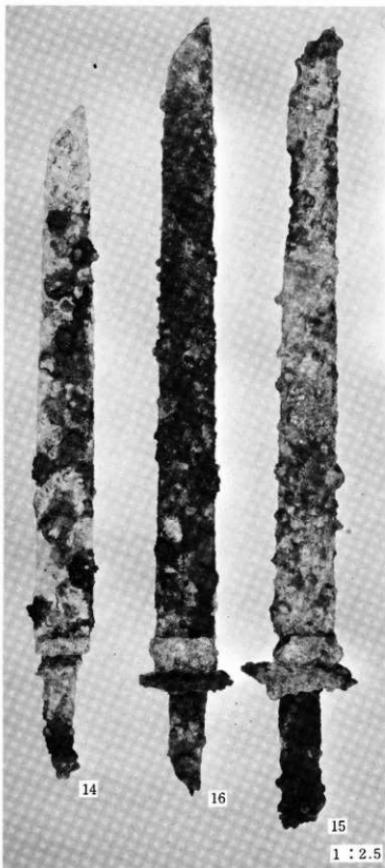
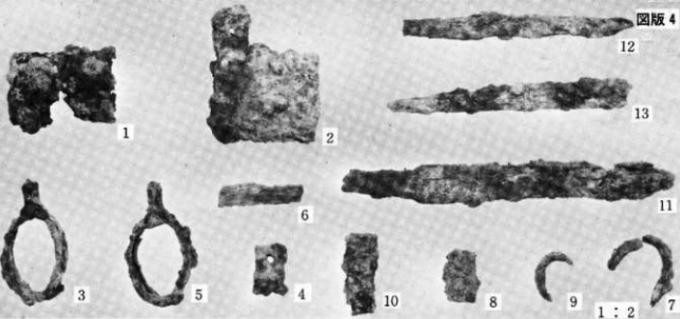
写 真 ・ 図 版







第4号横穴墓出土遺物ほか



第4号機穴墓出土人骨(一)



No. 4 - 1 頭蓋前面觀



No. 4 - 1 頭蓋左側面觀



No. 4 - 2 頭蓋前面觀



No. 4 - 2 頭蓋左側面觀



No. 4 - 3 頭蓋前面觀



No. 4 - 3 頭蓋左側面觀

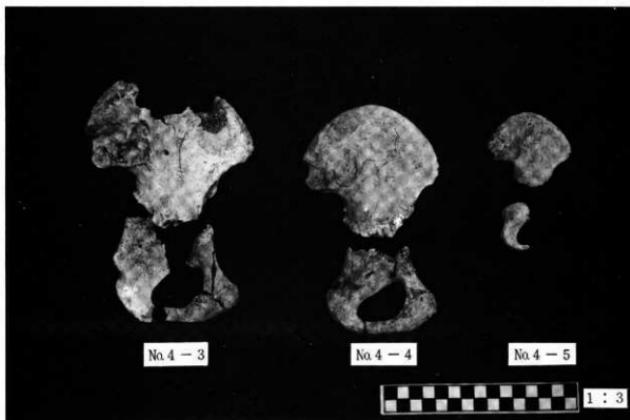
第4号横穴墓出土人骨(II)



大脛骨右後面觀



寬骨左內側面觀



寬骨左內側面觀

富山県高岡市

頭川城ヶ平横穴墓群

第1次緊急発掘調査概要

発行日 昭和58年3月31日

発行者 高岡市教育委員会

編集者 富山県埋蔵文化財

センター

高岡市教育委員会

印刷者 (株) 日康堂